

野上弥生子と明治女学校

はじめに

明治女学校は、明治一八（一八八五）年に木村熊二・鑑子夫妻によって、東京府麹町区飯田町一丁目（現、千代田区九段南一丁目）に創立された女学校で、日本人によって作られた日本最初のキリスト教主義にもとづく女学校である。

翌、明治一九（一八八六）年に、校母・木村鑑子がコレラによって急逝した後は、巖本善治が教頭・校長として学校運営を受け継ぎ、飯田町三丁目（明治二〇年）、下六番町（明治二三年）、北豊島郡巢鴨村（明治三〇年）と校地・校舎を移転しながら、時代に先駆けた女子教育を行った。

同校は、明治四二（一九〇九）年に経済的理由などから廃校となり、その使命を終えたが、四半世紀にも満たない短い歴史の中で、一時代を築き上げたと言っても過言ではない。同時代に対して啓蒙的な役割

野上弥生子と明治女学校

中村直子

を果たした女学校であった。羽仁もと子、相馬黒光、五島千代槌、山室機恵子、大塚楠緒子、野上弥生子など、各界に名を残すことになる卒業生を多数輩出するとともに、同校とは車の両輪と喩えられる雑誌『女学雑誌』や『文学界』を主宰し、啓蒙的な活動を幅広く展開したことも知られる。

昭和六〇（一九八五）年に九九歳の生涯を終えた作家・野上弥生子は、明治三三（一九〇〇）年に明治女学校普通科に入学し、明治三九（一九〇六）年に高等科を卒業した、明治女学校高等科の最後の卒業生である。弥生子は大分県臼杵市の出身で、臼杵尋常高等小学校を卒業後、醸造業で成功していた父の人脈で、当時としては珍しく東京の女学校に通うことになった。当初は東京女学館に通う予定であったが、叔父の知人であった『横浜毎日新聞』主筆・島田三郎の依頼で弥生子の入学を世話することになった社会主義運動家・木下尚江に連れられ、「本当の学問ができる」という弥生子の希望をかなえる学校とし

て、明治女学校に入学することとなった。そして、卒業までの六年間、叔父宅に寄宿しながら普通科・高等科で学んだ。

小説『森』は、昭和四二（一九六七）年に起筆され、昭和四七（一九七二）年から死によって未完となる昭和六〇（一九八五）年までの一三年間にわたって『新潮』に断続的に連載された野上弥生子の絶筆作品であり、巣鴨時代の明治女学校を舞台とし、普通科在学中の三年間を描いた、虚構の形をとった自伝的小説である。

本稿では最初に、当時すでに八〇歳を越えていた野上弥生子が、およそ七〇年前の明治女学校学生時代を描くに至った、いわば執筆動機を確認したい。続いて明治女学校の歴史的事実を概観した上で、一五歳の弥生子の目に映った明治女学校がどのような世界であり七〇年後の作家・弥生子によってどのように描かれたか、『森』の物語世界を検証したい。またさらに、明治女学校が野上弥生子に与えた影響についても考察したいと思う。

一、詩と真実

『森』以前の文学作品において、明治女学校のことを描かれたものとしては、島崎藤村『春』（明治四一年）・『桜の実の熟する時』（大正八年）、羽仁もと子『半生を語る』（昭和三年）、相馬黒光『黙移』（昭和九年）、白井吉見『安曇野』（昭和三九―四八年）などがひろく知ら

れている。島崎藤村は明治二五年からの数年間、明治女学校で英語を教えた教員であるが、悲恋に終わった学生・佐藤輔子とのロマンスを中心に『春』、続いて『桜の実の熟する時』を書いた。また、羽仁もと子は飯田町時代、相馬黒光は下六番町時代の明治女学校の卒業生として、それぞれの時代の明治女学校を回想録に描いた。

明治三九（一九〇六）年の漱石山房で披露された小品『明暗』以来、文学作品をたゆまず発表し続けていた野上弥生子であるが、「作家なら誰もいち早く書いたであらうこの話」（日記 昭和三九年一〇月七日）を、なぜ最晩年に至るまで小説の題材として取り上げようとしなかったのであろうか。

野上弥生子が繰り返し語るところによると、当時の中央公論社社長・嶋中雄作が、「藤村の『春』のような形で青鞥社のことなどを中心とした自伝的小説を書いてほしい」と、弥生子に再三要請していたが、弥生子には、「自分が作家だという覚悟がないせいか、人のプライバシーに触れることがどうしてもできない」という理由で自伝の執筆に踏み切れなかった。しかし、同校最後の卒業生である弥生子自身が八〇歳を過ぎ、関係者の多くが幽明を異にしたいまとなつてはプライバシーを慮る必要がなくなったので、執筆に踏み切ったということである。⁽¹⁾

昭和四七（一九七二）年の『森』第一章発表にあたって併載された

「作者の言葉」⁽²⁾において、野上弥生子は次のように書いている。

しかし今日までの長い年月にたまたま知りあい、触れあい、まことにいつの世の契り^{ちぎ}であったか、と思ひ偲ぶ人々には、一般には見あたらぬ独自の存在者がすくなくない。それ故これらについて語り、どんな時期にどんなかわり合いをしたかを書いておくのはたんに個人の回顧にとどまらず、明治の社会史、女性史にとっても無駄ではなからう、としだいに考えるようになった。とはいえなから、どうはしめよう。(中略)私はせめて揺籃時代からときめた、なおいうならば、これは精神的なゆりかごの意味である。

具体的な創作期間についてであるが、この「揺籃時代」とよぶ明治女学校時代を描くことを決意した野上弥生子が、小説化にむけて準備をはじめたのが昭和四一(一九六六)年頃であることは、日記の「青山なを氏あてに手紙。明治女学校について青山さんが荻窪の紀要に発表してゐた研究の件。あの学校時代からの事を書き始めたとしても、どこまでつゞけられるだろう。だん／＼自信がなくなるが、とにかく／＼準備だけでもと思ふ気持が強くなつてゐるからである。」(昭和四一年二月七日)、「青山なを氏の明治女学校の研究の最後の巻をとりだして読む。そろ／＼書いてみようかとの意欲がしきりであるが、(中略)「トリストラム・シャンディの(筆者注)」書きだしをよみつ、ふと木下尚江氏に連れられてはじめてあの森の学校に行つた日の事を

野上弥生子と明治女学校

こんなふうに書きだすのも一つの方法だと考へついた。」(昭和四二年六月二一日)などの記述から推測することができる。構想から未完に終わるまで、『森』は、じつに一九年をかけた作品であつたわけである。

なお、執筆準備のために野上弥生子が連絡を取つたという、東京女子大学教授・青山なをは、昭和三〇—四〇年代に明治女学校に関する研究を続け、東京女子大学(附属)比較文化研究所蔵「木村文書」(明治女学校創設者・木村熊二に関わる文献資料)の包括的な研究を進めるとともに、あわせて明治女学校の卒業生や関係者に対する調査も幅広く行つていた。成果は、『東京女子大学(附属)比較文化研究所紀要』に継続的に発表され、昭和四五(一九七〇)年に『明治女学校の研究』(慶應通信社)としてまとめられたが、これらの研究成果は調査に協力した明治女学校関係者にも送付されていたことが、同研究所蔵「青山なを資料」に記録として残されている。作家として活躍中の野上弥生子は、当然ながら、明治女学校の貴重な「生き証人」の一人であつたわけであり、研究成果の送付先にも「野上やゑ」の名は含まれている。

青山なをの明治女学校に関する研究の進展は、野上弥生子にとって大きな刺激であり、『森』執筆にあつたの有益な資料であつたことが、日記の「青山さんの女学雑誌によつてメモ作りをつゞける。巖本

像がしだいに彫りを深めて来る。」(昭和四二年一〇月二二日)、「今日も資料よみ。岩本善治^[註]なる一箇人のふくざつ性が「木村鑑子小伝」と「木村鑑子の伝」の発表の仕方にも十分伺へる。」(同二四日)などの記述にも示されているし、弥生子と青山が面談して明治女学校に関する情報を交換していることが数度にわたって記述されている。

ところで、『森』は野上弥生子が明治女学校を題材にして創作した唯一の小説作品であるわけだが、小説という形式以外の随筆や談話として弥生子が明治女学校について公にしたものには、『森』執筆期間を除いても、昭和一七(一九四二年)の随筆「その頃の思ひ出―師友のひとびと」⁽³⁾や、昭和二九(一九五四)年の対談「作家に聴く」⁽⁴⁾、昭和三〇(一九五五)年の『内村鑑三著作集』月報「私が女学生時代に見た内村さん」⁽⁵⁾などがある。いずれにも、いくつかの印象的なエピソードが繰り返し書かれている。それらのエピソードが繰り返し語られるのは『森』執筆中の対談・座談の類でも同様なのであるが、日記に「私にはいつもくく繰り返し話させられる事のみでなんらの感興もない。」(昭和四六年七月二九日)と記すように、野上弥生子が真に描きたかったことは、少女期の懐かしい思い出話でも明治女学校を廃校に追い込んだスキャンダルの真相でもない。

そのことは、野上弥生子の白井吉見『安曇野』をはじめとする先行作品に対する評価からもはっきりと知ることができる。『森』執筆中

の弥生子は、島崎藤村の『桜の実の熟する時』や相馬黒光『黙移』を再読し、資料として参考にしながらも、自らが『森』でめざすところと対比して冷静に評している。『黙移』については「お良さん[相馬黒光のこと(筆者注)]はすべて正直に書いたつもりで、ほんとうの事はみな避けてゐる。かうした記述では当然さうなるわけである。そこへ行くと文学のみが真を語れる。」(日記 昭和四二年一月三日)と評し、『桜の実の熟する時』に対しては「まへによんだ時より多くの事がえられた。また欠点もいろいろ。最後の旅に出るところ、二十一の青年とはおうよそ考へられない。こんな老人ぶつたところは、その他の描写にも多く感じられるが、執筆が藤村の老人期に近い為でもあり、また彼の筆致にもよるだらうが、若い悩みのかこちも訴えも、なにか年より臭い。『森』にはこんな欠点を犯し度くない」(日記 昭和五一年七月二一日)、『安曇野』に対しては「中村屋のお良さんと萩原守衛に重点をおいて書いてゐるらしいが、その背景のつもりらしい明治女学校のこと、女学雑誌、文学界の事など、黒光の「黙移」をそのままもつて来たやうで芸術作品より雑文に近い。創作といふものは批評する時のやうにはいかないのを感じとつたであらうか。むしろそんな点には考慮もないやうな粗雑さである。」(日記 昭和三九年一〇月一五日)と酷評している。

では、野上弥生子自身は、『森』という小説によって、「搖籃時代」

のなにをどのように描こうとしたのか。これに対する答えは、『森』の執筆中の二つの対談の中に得られよう。

わたくしみたいに平凡で単調な生活をした者の自叙伝なんか、おもしろくもなんともない。だから、書く資格がないなんていつていたのです。ところが、だんだん仏様になるのが近づいたのを考えると、自分自身のこととはともかくとして、かわりをもった人たちは、社会的にもいろいろな仕事をして非常に意義のある一生を送った方が多いのです。そういう方々との交渉を書きとめておくのも無駄ではないだろう、と考えたのですけれど……。

(中略) 入った学校そのものの成り立ち、その学校がどうして廃校になったかということと自分との関係を書いているのです。話ならば、こうやって池島さんにでも聞き役になっていただければ(笑)、それですむけれども、それじゃあ、つまりません。やはり芸術として、『詩と真実』のようなものにするのでなければ、作家として書く必要がないのではないか……。それで、第一編の土台として学校時代のことを書きはじめて、やっと百枚ばかりのところです。

(「これから私の『詩と真実』を」)
明治女学校はわたしにとって大事な揺籃^{ようらん}だったとは思ってんですけど、巖本善治がどうしてだれがこうしてというふうな生活の積み重ねなら、なにも苦勞して書くこともいらななんです。しかし、

野上弥生子と明治女学校

巖本氏がどうしてあいう生き方をしなければならなかったかということ、それから巖本氏をとりまく人たちがどうしてあいうふうな協同生活にはいり、それがどうして破綻をきたしたかという……それを芸術というの大げさですけど、それを文学の形で読みたいものとしなければ書く値打ちがない。まあ、わたくしとしてはそうしたいと思っっているんですよ。

(「緑蔭閑話」)

これらの対談の中で野上弥生子が「詩と真実」と言っているのは、ゲーテの自叙伝『詩と真実』にある「これはただの私の生活の結果である。さうしてここに語られた個々の事実は、ただ普遍的な観察、より、高い、真実を証明するために役立つにすぎない。——このうちに人生の二三の象徴を寓していると思ふ。私はこの書を『真実と詩』と名づけた。何となれば、より高い傾向によつて、低い、真実の世界から、高められてゐるからである。——吾々の生活の或る事実は、それが真実であるから価値があるのでなく、或る意義をもつために価値があるのである。」⁽⁸⁾という言葉を意識にしていると考えられる。作家的時間が残わずかとなった最晩年に至つて「揺籃期」を描くことに、老作家の幼少期・青年期への回帰願望を指摘する評者もいるが、『海進丸』『真知子』『迷路』など、社会性・時代性の強い小説を発表し続けてきた野上弥生子の場合、『森』が単にセンチメンタルな《自分の根っこ探しの旅》を目的としていないことは、容易に予想できるはずであ

る。一〇〇歳を目前にした弥生子が、命の残りの時間をすべて注ぎ込んで「森だけはなんとか完成させなければ」との執念で営々と書き続けたのは、女子教育・女性解放の歴史をその中心にあって体験した時代の証言者としての使命感に他ならなかったと考えるべきであろう。時代の動きを冷静に認識しつつ主体的・思惟的に生きた人間として、激動の時代を成熟した眼と筆で描くことは、作家野上弥生子自身にとっても魅力のある、命の残り時間を注ぎ込むに足る大事業であつたであろう。

野上弥生子は『森』において、単なる事実そのものではなく、事実を超えて明治女学校という共同体⁽⁹⁾が歴史に物語ること、すなわち「森の共同体」がどのような時代背景によつて生まれ、どのような使命を時代に果たし、なぜ崩壊したのかということ、そして共同体に生きた人々の存在を時代や社会の中で捉え直すことによつて、その深淵を描き出そうとしたわけである。

こうして野上弥生子は、回顧録という表現形式をとった羽仁もと子や相馬黒光のことは言うまでもなく、同じく虚構(小説)という形式を選んだ島崎藤村をも超越せんとし、また一〇〇年の生涯と重ね合わせて女性史・近代史の潮流を描き出すという壮大な構想を胸に抱いて、『森』の執筆に着手したのである。

二、明治女学校の盛衰

まず、物語の背景となる事実の確認として、明治女学校の歴史を概観したい。先述のように、明治女学校は、明治一八(一八八五)年に木村熊二・鑑子夫妻によつて創立された。木村熊二は旧幕臣で、明治三(一八七〇)年、明治政府の追捕から逃れるようにして少弁務使・森有礼の一行に加わり渡米。帰国命令にも従わずに一三年間アメリカに滞在して、ホープカレッジ、ニューブランズウィック改革派教会神学校などで医学・神学などを学び、明治一五(一八八二)年に牧師となつて帰国する。滞米中、アメリカ婦人の教養や見識に深く感銘を受けるとともに日本の女子教育の遅れを痛感し、留守宅を預かる妻・鑑子に宛てた手紙で女子教育の重要性、母・妻としての女性の役割の重要性を説き続けた。

帰国後、熊二の主張に賛同した鑑子や旧幕臣グループの協力を得て、東京府麹町区飯田町一丁目の旗本屋敷において明治女学校を創立した。発起人は木村熊二・田口卯吉(鑑子弟)・植村正久・島田三郎・巖本善治、校長は木村熊二、東京都公文書館所蔵の「設置願」⁽¹⁰⁾に記載された教員は木村熊二・津田梅子・人見ぎん・富井於菟であつた。

が、翌年、「学校取締」として明治女学校の実質的な運営を献身的に担っていた鑑子が、学生の看病をしていてコレラに罹患・急逝した

ことを契機に、校長・木村熊二は同校の運営から次第に離れるようになり、鑑子の遺志を受けたという巖本善治が教頭として学校運営を専ら受け継ぐことになる。

ミッシェンが関与しない、はじめての日本人の手によるキリスト教主義の教育を行う学校として、明治女学校は創立当初から先駆的な教育を行った。明治初期は富国強兵・欧化政策の一貫として女子教育が盛んに提唱され、福沢諭吉、中村正直、森有礼等の啓蒙的なはたらきも大きく結実し、数多くの女子教育機関が誕生した。しかし、中等教育以上の女子教育機関の多くは、外国からのミッシェンによって作られた女学校であり、外国式の女子教育が行われていた。明治女学校が創立された明治一七年頃は、日本の文化や社会を度外視したまま外国の女子教育を日本で行うことの弊害やそれに対する社会的反発が目立ってきた時期であった。

明治一八年八月の「明治女学校設立主意書」⁽¹¹⁾において木村熊二が、男尊女卑の弊を取り除き女子教育を実現することが日本の急務であることを主張するとともに、「外国女子の教育法は、未だ直に移して以て我国に用ふ可からざる者ある」と、日本の現状にあった女子教育の必要性を述べており、明治女学校では、「英語及地理歴史生理物理化学動物植物鉱物数学修身漢文等ノ諸学科」⁽¹²⁾の授業を行った。女学校でありながら家政科がなく、人文科学の幅広い教科が取り上げられてい

ることが特徴的である。創立当初の明治女学校が、女学校としてはいかに先駆的な教養主義的な教育を構想していたかということが「設置願」からも明らかである。「あの学校は今の高等学校でもあり、一番進んだ学校でございましたね。」⁽¹³⁾という卒業生の談話からも、明治女学校のめざしていた教養主義的教育というものが旧制高等学校と相通ずるものであったことを推し測ることができる。野上弥生子の「明治女学校のイデオといえますか、それは青鞥以上なんです。たとえば森有礼とか福沢諭吉とかが、女子教育の鼓吹者になっていきますけれども、森さんたちは、女が教育をもって男に負けないほどの人間に育てなければ国のためにならない。国が文明開化に向かうには女の教育が必要だというわけですね。ところが明治女学校を創立した木村(熊二)さんのお考え方っていうものは、女であると同時に人間でなくちゃならないっていうことです。から、青鞥社なんかの行き方よりも、もう明治十八年にそれを建前にして発足しているんですし、だからわたしども学校にいるときに、男だの女だのっていうふうな意識は、全然感じさせられなかったんです。」⁽¹⁴⁾という言葉が語るように、明治女学校がいかに高邁な理想にもとづいた進歩的な女子教育・女性解放の共同体であったかが伺える。

啓蒙的役割をもって先駆的に創立された明治女学校であるが、同校の最盛期は、巖本善治が教頭・校長として学校運営を受け継いだ飯田

町三丁目校舎時代（九段校舎）、および下六番町校舎時代（番町校舎）におとずれる。創立者の木村熊二は、鑑子急逝の翌年に伊藤はたと再婚した頃から明治女学校の運営から徐々に遠ざかり、信州における小諸義塾創立へと活動内容を転換する。（ただし、明治女学校をその終焉まで蔭ながら支えるのであるが。）

巖本善治が運営を受け継いだ後の明治女学校は、彼が明治一七（一八八四）年より主宰していた『女学雑誌』と一体となって、巖本が提唱したいいわゆる「女学」思想の鼓吹、女子教育の啓蒙を華々しく展開していく。「今日でこそ巖本善治の名を知る人は極めて稀であるが、明治二十年代に於ける彼の存在は、最も敬虔なクリスチャンとして植村正久や内村鑑三と肩を並べ、最も活動的なジャーナリストとしては徳富蘇峰と勢ひを競ひ、最も良心的な社会改良家としても島田三郎や石井十次と列を同じうし、しかも、女子教育界に於ては、彼に對抗するに足るほどの有力な人物がないといつてもよかつた。」¹⁵と評されるほど、巖本の社会的名声は高く、全国の婦女子が明治女学校に憧れを抱き、『女学雑誌』が展開する新しい女性像に注目し影響を受けていた。

学生数の増加にともない、飯田町一丁目の校舎では手狭になり、明治二〇（一八八七）年、飯田町三丁目九段坂上に「宏壮輪奐空に聳へ巍々として輝く」¹⁶洋館二階建ての新校舎を建築し、学生数も二百名を

超え隆盛を極めたのであるが、借地権の問題を明治女学校の経済力は解決できず、わずか三年後の明治二三（一八九〇）年に下六番町への移転を余儀なくされた。飯田町三丁目の校舎に比べれば「バラック建て粗末であつた」¹⁷と、九段校舎を知る卒業生・在校生を失望させた番町校舎であつたが、『桜の実の熟する時』や『黙移』で描かれたように、

この時期の明治女学校と『女学雑誌』を双肩に背負つた巖本善治の活躍はめざましく、植村正久や内村鑑三、安井てつなどの著名人が講演に訪れ、島崎藤村や北村透谷をはじめとする『女学雑誌』やのちに『女学雑誌』から独立する『文学界』誌上で活躍する青年文学者たちが教師兼文学界の旗手として活動を繰り広げていた。番町時代に実質二年間、教師として英語・英文学の授業を担当した藤村は、番町時代の明治女学校を『桜の実の熟する時』において、次のように描いている。

雑誌『女学雑誌』（筆者注）の中に出て来ることも、いろいろだ。一方にプロテスタントの精神の鼓吹があり、一方に暗い中世期の武道というようなものの紹介がある。一方に矯風と慈善の事業が説きすすめられ、孤児と白痴の教育や救済が叫ばれているかと思えば、一方にはまた眼前の事象に相關しないような高踏的な文字が並べられている。丁度あの雑誌の中に現れていたものは、そのまま学校の方にも宛嵌めて見ることが出来た。こうした意気込

の強い、雑駁な学問の空気の中が、捨吉〔藤村（筆者注）〕の胸に浮かんで来る麴町の学校だった。すべてが試みだ。そして、それがまた当時に於ける最も進んだ女の学問する場所の一つであった。およそ女性の改善と発達とに益があると思われるようなことから、仮令いかなる時代といかなる国との産物とを問わず、それを実際の教育に試みようとしていることが想像せられた。

こうして、明治女学校も、そして『黙移』に「およそ男性的なあらゆる美を備えた姿」、「お話がすんで講堂を出て来る時は、誰も誰も感激に眼をかがやかせ、人生のよろこびを深く感じ、或る時はまた先生の非凡な才気に全く敬服して、この学校に来たことの幸福を今更のよう強く感じて、うつつの如く足を運ぶという風」と評された校長・巖本善治自身も、日本の女子教育に一時代を築いたかのような隆盛ぶりであったが、ミッシェンの援助を受けない同校の経済的基盤が創立当初から脆弱であったことを忘れてはならない。（ちなみに、明治女学校が立ち退いた跡の飯田町三丁目の校地を手に入れたのは、強大なミッシェンを背景とする暁星学園であった。）この経済的脆弱さに追い打ちをかけたのが、明治二九（一八九六）年の類焼による校舎焼失と、巖本善治の妻・若松賤子の病死である。若松賤子は、日本初の口語文体による翻訳といわれる「小公子」を『女学雑誌』に発表して一躍有名になった作家で、『女学雑誌』の立役者でもあった。校舎焼失と賤

子の死という同時に訪れた二つの不幸を契機に、明治女学校と『女学雑誌』は、ともに衰退の一途を辿ることになる。

焼失の翌年に郊外の北豊島郡巢鴨村字庚申塚に校地・校舎を入手し、明治女学校は最後の移転をする。巢鴨の土地は木村熊二の実兄・櫻井勉の所有であったというが、明治女学校はこの巢鴨において、さらに約一二年間女子教育を続ける。新聞紙条例違反の疑いを受けた筆禍事件による『女学雑誌』の休刊、国家主義の台頭とキリスト教の衰退、明治三二（一八九九）年の私立学校令公布、明治三三（一九〇一）年の日本女子大学の開校、そして巖本善治の個人的な醜聞などが原因となつて、明治四二（一九〇九）年について廃校となり、二四年の歴史をとじた。途中、明治三七（一九〇四）年に校長を呉久美に交替したり、木村熊二の校長再任を要請したりして起死回生を図つたもののかなわず、明治期の教育界に燦然と光彩を放っていた明治女学校は、廃校を余儀なくされたのである。

野上弥生子が白杵から上京して入学したのは、明治女学校が巢鴨の田舎に移転して三年後、そして名実ともに兼ね備えた女子高等教育機関・日本女子大学校が開校する前年の明治三三（一九〇〇）年のことである。すなわち、弥生子が『森』において描いた明治女学校は、実のところは全盛期を疾うに過ぎ、終焉に向かって坂を下っている時だったのである。

三、『森』の明治女学校

前掲の「作者の言葉」に明言されているように、野上弥生子は『森』を書くにあたり、自叙伝ではなく虚構という形式、すなわち自伝的小説という形を選択した。これは、やはり前掲の『黙移』に対する評からも明らかのように、實在の人々を描く場合、自叙伝という形式には限界があり、虚構という形式を選択してこそ意のままに真実が描けるというのが野上弥生子の考えであった。また、上京したばかりの一五歳の少女の目に映った明治女学校と、作家として熟成した最晩年の弥生子に見えるものは異なっていて当然である。「いずれを真とすべきか。どちらも真であり、またそうでないかも知れない。こんなおもしろい最後の選択をさせた。(中略) 真実よりはむしろ虚構をとることに決めたのである。(中略) この作品が自叙伝でないとするのもそのためにすぎない。」¹⁸⁾という言葉や、前掲の『桜の実の熟する時』に対する「『森』にはこんな欠点を犯し度くない」という評のように、『森』という物語は、成熟した野上弥生子の視点ではなく、あくまでも菊地加根というなにもわからない一五歳の少女の視点で描かれていくのである。物語の主軸に関わる固有名詞が虚名、その他の社会背景的に用いられる固有名詞が実名と、敢えて虚実を書き分ける設定が用いられている所以もそこにあるう。

さて、「森の共同体」(『森』第四章「夢ふたたび」)が、加根の眼にどのように捉えられていくか、『森』の物語世界をひとまず追って特徴的な事柄を列挙してみたい。

菊地加根の目にはじめて映った日本女学院「明治女学校」が、およそ学校らしくない、郊外のコテージであったこと。

しかし校門もなければ、学校ならどこにも懸っている校名をしるした看板も見あたらない。わずかに表の街道から通路がついているのがただの森ではないのを示しており、はいって行くと、白い別荘ふうの洋館が見わたされ、もう一棟、そのほうは南京じとみを栗いろに塗った二階家が、車寄せの植込みをまえにして並んでいた。

(『森』第一章「入学」)

加根を日本女学院に案内した山下蕭雨「木下尚江」と校長の岡野直巳「巖本善治」が加根をよそに熱中する話題が田中正造の鉱毒事件であることや、駅で山下と食べるあんパンは、加根の覚醒への一步の表象であると読み解くことができるのであるが、これに関しては本田和子に「新たな生涯の誕生」¹⁹⁾というすぐれた指摘がある。

加根が入学した年の学生数はせいぜい数十人、別荘のような二階建てコテージの四室が教室という、二百名を超える学生数を誇った九段校舎や番町校舎とは天と地の感がある巣鴨校舎であるが、うら寂しい校舎や学園のたたずまいすら、加根の「子供っぽい好奇心にはお伽噺

の学校めいておもしろく」見えたこと。

授業はいつそう独特で、普通の教科書は一冊も用いられず、国文や漢文は原典で教えられ、週に八時間ある英語は文法も英語で教授される。試験はいつさい行われず、体操代わりの薙刀・剣術が勝海舟の寄付による道場で教授され、裁縫や料理のような科目はない。何よりも印象的なのは、倫理の代わりに毎週月曜日に開かれる岡野校長の道話であったこと。

月曜日の道話はまず聖書の一節が岡野校長によってよまれ、それにもとづいて、彼が説こうとする主題が説かれ、語られ、教会の説教などには見られない滋味と多様な展開で独特に魅力のあるものにする。加根にはわからないこともあったが、とにかく偉い話をきいている緊張感で身をかくしながらも、いつぼうひそかな困惑があった。最初の聖書の引例が、場所のはっきりしなかった埋没物に、かちつと鍬の先があたったおもいをさせた。

「やっぱり、耶蘇の学校だったのだ」

（『森』第一章「入学」）

岡野校長は日本女学院の敷地内に、三人の子供と亡妻・立松操子「若松賤子」の妹とともに住んでいて、再婚はせず、亡き妻の遺影とさながらうつし身に対するように語り合う日々であるというのが、学園の一番の神話となっていること。

その岡野校長が、日本女学院の剣術指南であった伊庭想太郎が東京

野上弥生子と明治女学校

市議会議長・星亨を暗殺した事件について、「昔の武士が貴人を刺殺する場合の儀礼とする作法であった」と道話において身振りを交えて話したことを、加根が言いようのない怖れとともに受け止めたこと。

敷地内に建てられた庵には、画学生・篠原健「荻原碌山（守衛）」も寄宿を許されており、彼をめぐってデュエットと呼ばれる森の学園随一の美人寄宿生二人に恋のつばぜり合いがあったこと。また、健が、クリスマスの夜の出来事を契機に、画家修業のために渡米したこと。

河本香村「島崎藤村」や青木駿一「北村透谷」らの青年教師と生徒の間に生まれた（キリスト教文化にもとづく新時代の恋愛としての）プラトニックラブが、学園の神話として学生たちに語り継がれていること。

友人に誘われた加根が、（謙和舎を主宰していた）元教師・村井幽寂「新井奥蓬」を訪問した際に、「あすこに集まっている方々は、皆さんただ人ではない。申さば、一人一人が龍であり、麒麟であり、鳳凰であります」「ただ遺憾ながら、龍や、麒麟や、鳳凰には、馬車は曳けない」と言われて、理解を超える衝撃を受けたこと。

以上のように、一五歳の「なにも知らない」「幼稚な」加根の魂を揺さぶるような出来事の積み重ねを描く一方で、作家・野上弥生子の語りは、さらに「加根の視点」から離れて、森の共同体に暮らす人々の内面にまで深く入り込み、日本女学院の別の側面をも浮かび上がらせていくようになる。

たとえば、教師の一人、玉井品江〔坂本夏子〕が同僚・黒木亮〔青柳有美〕に対してだけ吐露する岡野校長に対する辛辣な批判の数々が、学生時代に関係のあった岡野校長に対する失恋の恨みと、いまもなお捨てがたい未練の現れであること。

岡野校長が命日に欠かさない恩人・勝海舟の墓参は世間の美談化とは裏腹に女学生をともなつての不謹慎な小旅行であり、日本女学院の後援と称して岡野校長を取り巻いている富裕な卒業生との関係も世間を憚るいかがわしいものであることを、品江が鋭く見抜いていること。

また、品江の「三学期でもひっそり閑であんたの『新女性』『女学雑誌』まで赤字とあつては、ことは重大なわけだけれど」と黒木に語る言葉が指し示すように、日本女子大学「日本女子大学校」創立の煽りをうけた日本女学院が学生数をますます減らし、黒木が岡野校長に後を託された復刊後の『新女性』も発行部数を回復することができず、続刊が危ぶまれていたこと。

さらには、森の学園の神話、岡野校長と亡妻との愛のかたらいにも暗い闇が隠されていること。すなわち、女性の解放を謳う岡野校長が裏では亡妻の妹・とく〔島田みや〕に「妻の身代わり」を強いていること。また、複数の側室との妻妾同居を行っていた勝海舟の奔放な生き方に、岡野校長が抑えがたい憧れを抱いていること。

岡野校長が勝海舟の側室の幻影を重ね見た学生・園部はるみ〔清水豊

野〕との間に秘密の関係を重ねていたこと。そして、はるみ自身の告白によってこのことが求婚者に露呈したため、婚約者である医学生・加部圭助〔布施現之助〕が、岡野校長をメスを持つて追い回したこと。加部が信仰上の師であった内村鑑三を訪れて、事件を懺悔したこと。

この、布施現之助の事件は、羽仁もと子の『半生を語る』においては「あの爛漫たる才華のなかに、理もあり情もありながら、生ける信仰を欠いていた。その聡明さはキリスト教思想を解しているも、本気で神に仕えようとはしていなかったであろう。そのために美しい学校がとうとう魔の国にさらわれて行ってしまった。」と語られ、相馬黒光の『黙移』においては「極端に女性に興味のあった人物、いや女性に興味を持ち過ぎた人物というような世評に対しては、私は肯かねばなりません。」と暴かれた、世を騒がしたスキャンダルであるが、野上弥生子の言葉によると、この一件に対する内村鑑三の「清教徒風な忿怒」⁽²⁰⁾が、巖本善治を明治女学校からの退陣に追い込んだという。

七〇年の歳月を経て、明治女学校に関してのみならず、人の世のさまざまなことを識った作家・野上弥生子の老練な筆によって、女子教育・女性解放の中心として先駆的で啓蒙的な社会活動を行う明治女学校の表層と、その実は経営的にも政治的にも現状を打開できずにただ衰退の一途を辿るしかない明治女学校の現実、女子教育・女性解放の旗手として社会的地位を得ながらも私生活では封建的な男女関係を享

受している巖本善治という人間の深淵をも、重層的・多層的に描き出すことを、小説『森』は成し遂げたと言えるであろう。

不運にも『森』は、作者の死によって、完成を目前に未完で終わった。しかし、『森』を担当した編集者の記憶による、叔父の父に対する批判から金銭、社会に対して漸く目覚めた加根と、日露戦争などの社会情勢を重ねて描くという構想や、「加根の開眼と、新しい時代の幕明きとが重なる、という風に終らせれば」という言葉からも、物語の結末は想像が容易である。

一人の少女が三年間の森の学園での生活を通じて、人生を見つめる眼を得た、目覚めの物語がひとまず円環を閉じたのである。残念ながら、「いわゆる自叙伝としては、これからが面白いのよ。わたしも成長していつ世の中が大きな形で分かってくるし、いちばん接触するのが(伊藤)野枝さん、平塚(らいてう)さん、(中条)百合子さんでしょう。ですからこれを書くだけでも、日本の女性の歴史をすべて書くようなもので、わたしに余力があったらそこまで書きたいんです。」⁽²²⁾という作家野上弥生子の壮大な構想は、百歳を目前にした死によって実現せず、「森の学校」の円環を青鞥時代や戦争などの円環と結びつけていくことは叶わなかった。

おわりに

最後に、明治女学校が野上弥生子に与えた影響を考察して、本稿のまとめに代えたい。

まず、一つには、質の高い高等教育を挙げるべきであろう。「それらの教員免状をもっているような、いわゆる教師タイプの人は一人もいらっしやらなかった。」⁽²³⁾と野上弥生子が語るように、木村熊二、津田梅子、巖本善治、若松賤子、大西祝、元良勇次郎、大和田建樹、幸田延子、荻野吟子などの学界の第一人者と、星野天知、北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、青柳有美、桜井鷗村など明治学院や同志社を卒業して間もない気鋭の青年文学者たちを教授陣に有して、文部省の存在を度外視した独自で熱心な授業が行われた明治女学校は、巢鴨時代になっても、哲学は布川静淵、英語は青柳有美、戸川秋骨、国語は福田亀太郎といった「宗教的文化人」が教えていた。

創立当初から巢鴨時代まで、教科書は一貫して原典主義をとっており、シェイクスピアからトルストイの『復活』、ヘルムホルツの科学論文集まですべて英語で読ませるといふ、きわめて水準の高い英語教育を行った。『森』の加根が「まるで見当のつかないジャングル」で「辞書にかじりつき」になって学んだ結果が、卒業後の野上弥生子の仕事として大正期から昭和初期を中心に、『ソーニャ・ゴヴァアレフス

カ』(自伝)、『沙翁物語』(ラム著)、『アルプスの山の娘』(スピリ著)などの数多くの翻訳文学として花開くわけである。

次には、キリスト教との出会いを挙げたい。明治女学校は創立当初より、キリスト教主義にもとづく学校でありながらミッシンの援助を頼らず、また特定の宗派に属することをしなかった。そのために創立者の木村熊二とミッシンの関係に亀裂が生じたことが指摘されている。⁽²⁴⁾明治女学校には正課としてのキリスト教の授業はなく、先述した巖本善治の道話の中で聖書が取り上げられるほかは、礼拝や宗教の授業が行われたわけではなかった。しかしながら、月二回程度開かれる講演会で、植村正久、島田三郎、安井てつ、内村鑑三などのキリスト教関係者がしばしば講演するなど、学園全体がキリスト教的精神に包まれていた。「神」というものの概念を知ったってこと、これは大きいですね。超越者というものの存在を考える場合に、仏教よりもクリスト教の神の方が、私には強くうえつけられているというのは、やはり明治女学校の感化でしょう」という野上弥生子の言葉が明確に語るように、明治女学校が有していたキリスト教的精神は、森の共同体に深く浸みわたっていたと考えられる。

次に挙げられるのは、「社会に向ける眼差し」である。明治女学校が啓蒙雑誌『女学雑誌』と車の両輪の関係であったことは、繰り返し述べたとおりであるが、巖本善治を中心とする明治女学校という共同

体は、『女学雑誌』を通じて社会批判、社会啓蒙を絶えず行ってきた。『森』の冒頭で鉦毒事件が物語の表象になっていたように、明治女学校は常に社会に対して眼差しを向け、社会と主体的に関わって存在しようとしていた。鉦毒事件の公判に明治女学校の学生が揃って傍聴にかけたなどのエピソードも残されているが、鉦毒事件の例が指し示すように、それは時に反体制・反国家主義的な要素をも内包しており、文部省の規則にとらわれず天長節や教育勅語とも無縁の、おおよそ当時の学校の常識を逸脱した共同体であったわけである。

終生変わらず持ち続けた野上弥生子の社会情勢に対する関心の高さ、批評の眼差しは、最晩年まで堂々と書き続けられた日記の記述の中に驚かされるほど顕著である。青鞥グループの人々や宮本百合子らとの交流も、弥生子が明治女学校で身につけた、社会に向ける鋭敏な眼差しの現れの一つに他あるまい。

さらにもう一つ挙げられるのは、野上弥生子が「精神主義」と表現するところの曰く言いがたい、明治女学校の精神主義的雰囲気である。相馬黒光が「あの情熱、あの憧憬、明治女学校のあの百花爛漫の中を出たものは、よかれあしかれただけでは納まらない。対象そのものよりもむしろ自身醗酵^{うんじょう}するところのものに立籠り、何等か熱情的な生き方をせねば止まらない、そういう一つの気質を宿命的に負わされたような形がごいます。」と『黙移』に書いた、明治女学校の浪漫

主義的な情熱、矜持は、創立当初から巢鴨時代までの多くの卒業生が共有していたものであった。

醜聞に倒れた巖本善治に代わり、明治女学校を終焉まで文字どおり献身的に支えた教員・青柳有美の妻は明治女学校初期の卒業生であるが、この青柳春代を評して弥生子は「青柳さん一家の様子、想像以上の貧しさを忍んだらしいのに、息子の解剖学者、またこれらの娘たちみんな立派なひと／＼として成長したのは、春代夫人の手柄であろう。明治女学校の精神主義を十分に身につけてゐたのだ。」（日記 明治四八（一九七三）年六月二六日、傍線筆者）として、「精神主義」という言葉を使っている。社会常識や因習、時代の潮流といったものに左右されない確固たる自己の確立、矜持と信念をもって忍耐強く生きること、この精神性が明治女学校で培われたものだと考えられないだろうか。野上弥生子が生涯を通じ学問的向上心を抱き続けたのも、明治女学校で得た精神性と深く結びついているであろう。

最後に、明治女学校の命運に致命的な打撃を与えた、校長・巖本善治の醜聞である。「それ『青柳有美（筆者注）』が、巖本さんと結びつきができていた女学生に求婚して、そこにまた、布施という仙台の医学校を建てた人がライバルとして現れたり。（中略）それで「わたしはマグダラのマリヤだから求婚されても資格がない」という告白から始まって……。それで、布施さんが巖本さんのところに飛び込んでいく

わけ。」⁽²⁶⁾とかつて対談で語った野上弥生子であるが、先述のように『森』においては、恋人・園部はるみと岡野校長の人目を忍ぶ関係をはるみの告白で知った医学生・加部圭助がメスを持って岡野校長を追ひ返し、内村鑑三に懺悔する、という物語展開になっている。

巖本善治の醜聞がこの事件に限らなかったことは、亡妻の妹との内縁関係や縊死に終わる坂本夏子との関係などを一端として関係者の知るところであるが、この事件を契機に巖本善治は明治女学校の表舞台から次第に姿を消し、校舎焼失によって深刻さを増した経済的破綻と相俟って、明治女学校が廃校へと追い込まれるわけである。

森の学園で起きたこの事件は、一五歳の野上弥生子に驚天動地の衝撃を与えた。森の共同体の中心にあつて伝説に彩られながら君臨していた、神のような存在・巖本校長の、知られざる裏の姿のぶざまな露呈は、人間の存在の深淵を一五歳の「幼稚な」少女に閃光のように顕示した。「はじめて人生に眼を開けられたような」⁽²⁷⁾、「人間というものは、わからないものだ」という実感⁽²⁸⁾を抱かせたこの事件を契機に、弥生子は人間の多様性というものを知るとともに、人間の内面や社会の深淵に向ける眼差しを開かされたのである。

しかし、「巖本善治がどうしてだれがこうしてというふうな生活の積み重ねなら、なにも苦勞して書くこともいらぬ」と明言する野上弥生子が『森』で描こうとしたのは、世の好奇心を満足させる醜聞の

暴露でも偽善者の失墜の物語でもなかった。弥生子の人間の深淵に向ける眼差しは、「巖本氏がどうしてああいう生き方をしなければならなかったかということ、それから巖本氏をとりまく人たちがどうしてああいうふうな協同生活にはいり、それがどうして破綻をきたしたか」という、人間存在の深層に粘り強く迫り、文献資料を読み解きながら思索を続けていく。そして、巖本善治という人間を解く鍵としての存在・勝海舟に至るのである。巖本善治と勝海舟の関係は、明治一九（一八八六）年に『木村鐙子小伝』の序文執筆を依頼しに、巖本が木村夫妻と縁の深かった勝を訪問したことに始まる。勝に対してそれまでは批判的であった巖本が一転して勝の崇拜者となり私淑して、氷川邸に通って談話を書き留めるようになる。それが『海舟余波』、のちに『海舟座談』としてまとめられた。²⁹

野上弥生子が勝海舟の存在に、巖本善治の蹟きとその後の人生を解く鍵を読んでいたことは、日記の「星亨の事件から伊庭想太郎、それを勝海舟につなぐことで、岡野直巳の内面に触れさせてはと思ひつく。」（昭和四九年三月二八日）や、対談で語られた「あの不幸な校長の内面生活に入るには、あの人と切り離せない関係にある勝海舟を通して入るのが一番いい」³⁰、「社会の裏面を、巖本さんは勝海舟から学んだのよ。そのことをあんまりいままでも論じた人がいないから、わたしはそこを書こうと立案しているんですけどね」³¹などの言葉からも知

ることができる。

一五歳の少女に人生の眼を開かせた事件が、七〇年の歳月を経た作家の目には、「あのころ巖本先生のまわりにいた者たちの、先生に対する崇拜が無批判であった」³²、「彼が非常に背徳者であるかのように言われているけれども、わたくしには最も人間的に生きた人としか、いまは思えない」³³という認識へと醸成されているのである。野上弥生子が作家として人間として、常にあわせ持ち続けた、社会に向ける眼差しと人間の内に向ける眼差し、これこそが明治女学校で得たもつとも大きなものであったと言えるのではないだろうか。

「東京女学館と明治女学校（筆者注）」二つの学校の対蹠的な性質を比較するにつけ、それに入学しないで明治女学校を択んだのが、私の一生の傾向に殆んど運命的に影響したことを後年思いやると、おもしろいより「偶然」の怖ろしさを感じさせられた。（中略）私はこの学校でクリスト教の神の存在を知った。（信じたとはでは云えないが。）ものを考えることを知った。精神的なものを重んじることを知った。そうして疑うことをも。

（「その頃の思ひ出」）

「思えば思うほど奇妙な入学をした」明治女学校が、一人の作家・人間に与えた影響の大きさを、『森』はその作品を通じて、われわれに語りかけている。「精神のゆりかご」明治女学校で得たものを核とし

て熟成し続けることによって野上弥生子は、個人としての確固たる自己実現の形を追求しながら、作家として家庭人として、その後八〇年に及ぶ長い道のりを孜々として歩み続けたのである。

注

- (1) 「緑蔭閑話」昭和四六(一九七二)年『野上弥生子全集』別巻二所載。
- (2) 『野上弥生子全集』第二期 第二八卷所載。
- (3) 『野上弥生子全集』第一九卷所載。
- (4) 『野上弥生子全集』第二二卷所載。
- (5) 『野上弥生子全集』第二二卷所載。
- (6) 昭和四四(一九六九)年の対談。『野上弥生子全集』別巻二所載。
- (7) 注(1)に同じ。
- (8) ゲーテ著・小牧健夫訳『詩と真実』(岩波書店 昭和一七年)。
- (9) 「女学校そのものがもともと風変わりで、学校よりむしろ塾で、地理的にも市井から遠い森の中の一種の共同体にひとしかったので、」(傍線筆者、「作者の言葉」『野上弥生子全集』第二期 第二八卷所載)。
- (10) 青山なを『明治女学校の研究』(慶應通信社 昭和四五年)付録一。
- (11) 前掲『明治女学校の研究』第四章第二節。
- (12) 「設置願」。注(10)に同じ。
- (13) 「婦人文化の揺籃 明治女学校を語る」(『実録文学』昭和一〇年二月)。引用は、東京女子大学比較文化研究所所蔵「青山なを資料」の筆写文献によった。
- (14) 「緑蔭閑話」。注(1)に同じ。
- (15) 神崎清『女学校ものがたり』(東海出版社 昭和一五年)。

- (16) 前掲『明治女学校の研究』第二章第一節。
- (17) 同右。
- (18) 「作者の言葉」。注(2)に同じ。
- (19) 「入学の日を彩る出来事として、「にんじん」と「あんパン」の他に、この「鉅毒事件」が位置づけられるのは、やはりこの日こそが彼女にとって、知的で精神的な、そして、社会の動向にも敏くあろうと志す、新たな生涯の誕生であったことを物語るだろう。」(本田和子「森」―近代型女人の神話と時代―『女学生の系譜―彩色される明治―』(青土社 平成二年)。
- (20) 「これは事実かどうか知らないが、学校の致命的な変転は、内村氏の純粹な清教徒風な忿怒が原因の一つになった、と当時ひそひそ話に聞いた時、あの顔で怒ったらさぞ怖いだろう、となにか身震いする感じを女学生の私は受けたものであった。」(「その頃の思ひ出」注(3)に同じ)。
- (21) 小島千加子「森」―経過と最後―(『月報二五』『野上弥生子全集』第二期 第一七三卷所載)。
- (22) 「昔の話 今の話」昭和五六(一九八一)年『野上弥生子全集』別巻二所載。
- (23) 「妻と母と作家の統一に生きた人生」昭和四二(一九六七)年『野上弥生子全集』別巻二所載。
- (24) 前掲『明治女学校の研究』第四章第二節。
- (25) 「妻と母と作家の統一に生きた人生」。注(23)に同じ。
- (26) 「思い出すことども」昭和五五(一九八〇)年『野上弥生子全集』第二期 第二九卷所載。
- (27) 「作家に聴く」。注(4)に同じ。
- (28) 「妻と母と作家の統一に生きた人生」。注(23)に同じ。
- (29) 巖本善治編『海舟座談』(岩波書店 昭和五年)。

(30) 「迷路」 野上弥生子さんに聞く」昭和五〇（一九七五）年『野上弥生子全集』別巻二所載。

(31) 「思い出すことども」。注(26)に同じ。

(32) 「妻と母と作家の統一に生きた人生」。注(23)に同じ。

(33) 「緑蔭閑話」。注(1)に同じ。

* 野上弥生子の著述の引用は、『野上弥生子全集』全二三巻・別冊三・月報一（岩波書店 昭和五五―六〇年）、および『野上弥生子全集 第二期』全二九巻（岩波書店 昭和六一―平成三年）によった。日記は、『野上弥生子全集 第二期』に収録されているが、煩を避けるため、注記への巻号の記載を略した。

〔本研究所助教（日本近現代文学） 二〇〇四―〇六年度個人研究員〕